学校をつくろう!通信

がっこう・N.P.O. 珊瑚舎スコーレ

第133号

学校の役割　　その １１２

「大学での学び」というテーマで学生たちに話をしてほしいという依頼があり、先日話してきました。プレゼンテーション用のソフトのパワーポイント（ＰＰ）を使いましたが、100 名ほどの学生たちにとっては「何？この人」と思いながらぼーっとしているうちに 90 分が経っていたというのが正直なところかなと思います。彼らが持っているはずの思考スイッチに手が伸びた学生はどれほどいたのでしょうか。申し訳ない！ことです。

野球では３割バッターを野手は目指します。１０回打って３回ヒットを打てば強打者だそうです。僕は７割プレゼンターを目指してます。１０人中７人が思考スイッチを入れてくれれば、まずはＯＫということです。７割をどのように判断するのかは話し始めてからしばらく経過した会場の空気です。心地いい集中と開放の繰り返しです。今回、波は生まれていませんでした。ＰＰの１ページ目、

> 生まれて来てしまったぜ！
> しかもヒトにだぜ！！
>
> 沖縄大学論
> 「大学での学び」について
> 15-25 歳の僕のハートと
> ノーミソの中身をもとに

この二つの感嘆符、！と！！を打つことが僕の学び、つまり思考と思索の始まりだったと思います。「生まれる」ということ、「ヒトである」ということを取りとめもなく考えました。今でもその取止めのないぐるぐる巡りは続いていて、いい暇つぶしになっています。兼好が言う「つれづれ詫ぶる人はいかなる心ならん。紛るるかたなくただひとりあるのみこそよけれ」はこんな時間かなと思ったりします。この学びは社会的な価値、例えば学歴や諸々の資格などを手に入れるための学びではなく、ヒトという存在を考え、ヒトである自分を生きるための学びです。

学びとは情報を得ることです。情報を得るためには思考する必要があります。ぼーっとしていては情報を得られません。状況に反応するだけです。ヒト以外の生き物のほとんどは反応だけで生きています。しかし、ヒトは思考と思索を身につけました。思索は情報をもとに自己をめぐる諸々の状況をつくることです。宮沢賢治はこれを「私という現象」といいました。これほど見事に人間を捉えた美しい言葉を僕は知りません。思考し、思索することが種としてのヒトが「私」という固有の生命現象への変容を可能にするのです。思索の質、つまり幅と厚みにより生まれる状況はまちまちです。思索どころか反応が生活のメインになっていることもあるかも知れません。それこそ童謡の「歌を忘れたかなりや」ではありませんが「『私』を忘れたヒト」はマズイです。

「大学での学び」は専門分野に係りなく、思索の幅と厚みを求める自分をつくることだと思います。別に大学に行かなくてもできることですが、大学だからできることがあります。「学びの時間」、「学びの空間」、「学びの同行者」が手元にあるのです。そこでの体験は生涯よって立つべき価値のありかを指し示してくれるはずです。これは恵まれたことです。恵まれたことではありますが、そのような場にするための努力を学生と教員はしなければなりません。

珊瑚舎スコーレは高等部を学校法人化して高等専修学校としての認可を得るための準備をしています。卒業が大学受験資格取得となるための申請をする計画です。しかし、資格は結果であって目的にはなりません。珊瑚舎スコーレ高等部での学びは、卒業後どのような場を卒業生が選んだとしても、思索する「私」になるためにあります。具体的にはヒトが気の遠くなるほどの時間の中で創造した「個の尊重」という概念に幅と厚みをもたらす「私」です。（ほ）

がじゅまる しんかぬちゃー

（生徒・学生のコーナーです）

先月、東アジア共同体研究所　琉球・沖縄センター主催、食を通してアジア諸国との友好交流を図る「アジア麺ロード」というイベントが開かれました。台湾、韓国、中国、ネパールなど様々なアジア諸国の料理が軒を並べます。センターのお誘いにより、舞台や会場作り等の手伝いをしながら生徒達も出店させていただきました。

「アジア麺ロードで感じたこと」

高等部　山下　夏悠

11 月 16 日、17 日の 2 日間、アジア麺ロードに出店させていただきました。栄町にあるロイヤルミャンマー（ミャンマー料理のお店で、その売り上げの一部をミャンマーの小学校での活動資金にしています）のソウさんカイさんに協力していただき、ミャンマーのココナッツミルク麺とサモサを販売しました。

牧志駅前の会場にはたくさんのテントが設営されており、その１ブースに珊瑚舎は出店しました。飾りつけ班は前日から会場で店の準備を行いました。私はメニュー班だったので、ロイヤルミャンマーでサモサの準備をしていて、当日まで店の雰囲気もイベント自体の雰囲気も何もわからず、楽しみよりも不安の方が大きかったのを覚えています。実際、会場入りして販売準備を進めてくうちにその不安感は完全に吹き飛び、高校時代の文化祭のようだと少し懐かしさすら感じました。

１日目のお昼ごろ、販売をしてみて、装飾が不十分ではないかという意見がありました。２日目はメニューのカラー写真を看板に何枚も貼るなど、装飾を増やしてみることにしました。１日目と違い他の店に見劣りせず、目につきやすい店構えにすることが出来ました。

１日目に仕事をしてみて、シフトに不備がないか相談し、調整もしました。
呼び込みで何を説明すればお客さんが食いつくか、試食があれば買う人が増えるのではないかなど、皆で話し合いどんどん挑戦していきました。２日目はココナッツミルク麺もサモサも予定していた販売数より多く売ることが出来ました。

私はこのイベントを通して、珊瑚舎の生徒の強さに気付きました。
ダメな点に気付いた時、落ち込むのではなくどうすれば良くなるのか考え、話し合い、工夫できるという点です。試してみてダメならまた考え試す。
誰かから指示されるわけでもなく、それを自然とやってしまう生徒達を私は尊敬しています。そして羨ましくも思います。

ふくぎのふぁー

（講師・スタッフのコーナーです）

「数と記号」（初等部・中等部）

担当講師　　謝花　香奈江

初等部と中等部（火曜日のみ）で、数と記号の授業を担当しています。謝花香奈江です。今年の４月から、珊瑚舎で授業をもたせていただくことになりました。

みなさんは、「数学・算数」と聞くと何を思いますか？私はこれまで、数学が好きで勉強をしていましたし、なんで数学を勉強しないといけないんだ！といった疑問をもったこともないので、「難しいけど数学やりたい！」と思います。しかし、大学を卒業して外の世界に出てみると、一般的にはそうでない…と感じることも多くなりました。珊瑚舎でも、「計算？嫌だー。意味分からんし。」という声をたくさん聞きます。声に出さなくても、何となくネガティブな気持ちが伝わってきます。

そこで私は、「数学に対するハードルが下がれば、勉強する気持ちが湧いてくるのではないか」と考えました。授業では、テキスト以外で広く数学に触れる時間を作るようにしています。

最近の初等部では、暗号ゲームが流行っています。数字や記号を違うものに変換する。暗号にどんな規則があるか考える。自分で暗号を作ってみる。生徒それぞれが思ったことを言葉にしながら、少しずつ暗号解読をしています。初等部で考えた暗号を、高等部の生徒に出題してみました。手こずっている暗号もありましたが、さすが！高等部！！あっさり解読されてしまいました。

中等部では、数学に関する様々な小ネタを紹介したり、生徒が教える側に立って授業を進めてもらったりしています。テキストの時間もあります。絵が得意な生徒の特別授業では、絵の描き方を教えてもらいました。カッコイイ絵には鋭角がたくさんある。カワイイ絵は丸っこく描く。「鋭角・丸」も数学に繋がる要素だと思っています。多少の無理やり感はあっても、数学に繋がれば何でもOKです。あと数名、特別授業をしてもらいたいです。

こんな感じで４月から授業をさせてもらっていますが、果たしてこれが生徒にとって良いやり方なのか…。たくさん計算ができるように、テキストをガンガン進めていったほうが良いのではないか…。不安が尽きることはありません。模索しながら毎回の授業を迎えています。もうすぐ冬休みなので、新しい小ネタを探しつつ、気持ちをリフレッシュしようと思っています。初等部、中等部のみなさん、何か気になることを見つけたら、いつでも教えてくださいね。

みんなの「数学やってみよう」のきっかけが見つかるように。これからもよろしくお願いします。

子どもがんまり便り

今回の講師は、マコケ。珊瑚舎スコーレ初等部・中等部合同の授業「アートタイム」と初等部の「道具と手仕事」を担当している方です。リピーター参加者には顔なじみですが、ご自身畑づくりをされているので「子どもがんまり」では毎回、草花を使ったワークショップや野菜の畑や野菜の話を織り交ぜながら、種まき、畑作業などのワークショップを企画してくれます。

この日は山がんまりにある植物を観る事に焦点を当てたワークショップでした。まずは島ニンジンの種まきからスタート。

軽く優しく種をばらまき、その上からさらに優しく土をかける。何時頃収穫できるか？たくさんでき

るか？などワクワクしながら土をいじりました。その後は、食べられる葉を見つけること。子ども達の中には、これ！と言ってシロバナセンダンソウやアカバナー（ハイビスカス）の葉や花を持ってくる子も。畑の学校の先生から前回教わったことをよく覚えてくれています。せっかくなので、とったアカバナーの花でお茶を作りました。アカバナーに熱湯を注ぎ軽くかき混ぜるとお湯が紫色になります。そこへがんまりで育ったシークワーサーのしぼり汁を加えると、不思議不思議、さっと鮮やかな赤に変身。やる度に子ども達は大喜び。採ってきた葉や残りの花は天ぷらになりました。

午後は各自が採ってきた葉の上に紙を置いて、上から葉脈や葉をなぞって形を浮き出させるフロッタージュというワークショップ。なぞってそのままの作品や色を付けた作品もあれば、なぞった形から更に様々な線を生み出して動物や植物、魚、曼荼羅（？）などに見立てた作品もあり、勢ぞろいするとなかなか見ごたえのある作品が出来上がりました。

（事務局スタッフ）

沖縄だより

イチチ　マルグム
（五つ丸雲）

埼玉大学　福島ゼミ４年　川面　孝平

皆さんこんにちは。11 月 18 日から 1 週間ほど授業の見学でお邪魔させていただきました、川面と申します。私は関東にある大学のゼミで教育社会学を専攻し、主に教育現場で教師も子どもも「ありのままの自分」を大切にしながら日々を送っていくためにはどうすればいいのかということを研究しています。現在一条校といわれる学校の現場では、児童生徒をそれぞれが個性を持つ個の集合であるという観点から見ることをせず、その同一性を重視するが故に「ありのまま」であることよりも「学生らしく」あることこそが健全であるとし、校則で縛り、授業で縛り、大人との上下関係で縛り、子どもたちを教育ではなく「管理」しようとする事例が多く見られます。今回は珊瑚舎スコーレさんがこの現状の打開に大きな可能性を持っていると考え、授業に参加させていただく運びとなりました。

訪問させていただくのは今回で 3 回目だったのですが、初訪問の際に見させていただいた授業の様子や子どもたちの姿に度肝を抜かれたことを今でも鮮明に覚えています。なぜなら多くの授業で子どもたちがそれぞれの個性を輝かせ楽しんでいたからです。学校は通わなければならないところであり、毎日の授業が楽しいなんて思ったこともなかった私にとって今回の訪問も驚きの場面の連続でした。その最たるものがシンカ会議です。この時間では子どもたちが珊瑚舎全体のことや授業のことについて、全員が納得できるようなモノにするためにはどうすればいいのかを全員で考え議論していました。またスタッフの大人の方々には、その子どもたちからの提案を共通の場で対等な立場から吟味し、珊瑚舎や授業の方向性を一緒に考え改善していくという姿が見られました。この、学校を大人も子どもも関係なく、そこにいる「全員でつくっていく」という光景は現代の多くの学校では見られないものであり、この仕組みが子どもたちの「ありのままの姿」を守っているのかなと感じました。

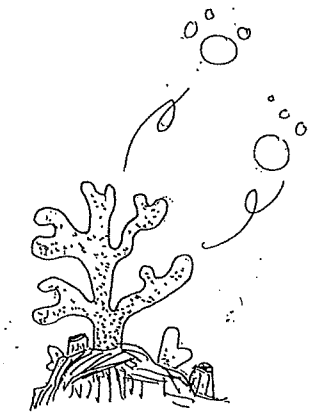
3 度の訪問を通して、こちらで行われている素晴らしい取り組みには、星野さんや遠藤さんを始めとしたスタッフの皆さんのたゆまぬ努力と試行錯誤があるということに加え、通っている子どもたちの探求や学びにかける溢れんばかりの意欲や情熱が欠かせず、実現することは大変困難であると重々承知ではありつつも、一条校においても珊瑚舎スコーレの

ような「ありのままの姿を大切にみんなで学んでいく」という雰囲気が醸成されれば、学校という場がもっとイイものになっていくのではないかと強く思いました。私が実際に教師として教育現場に立った際には、これまでの訪問で学んだことや感じたことを胸に刻んで励んでいきたいと思います。

短い間でしたが貴重な体験をさせて頂き本当にありがとうございました。また皆さんに会える日を楽しみにしています！

新企画！
ポリプのゆくえ

珊瑚舎から旅立ったポリプの幼生達（卒業生、講師、そのほか巣立って行った人たち）が、定着した先々で今どうしているのか。リレー形式で綴ってもらいます。



珊瑚舎を卒業して約 10 年、この世に生まれて 29 年。このところ色々あってずっと忙しかったが良い機会だと思い久々に文章らしいものを書いている。自分の思っている事を書くなんてそれこそ 10 年ぶりかもしれない。珊瑚舎にいた頃は喫茶店なんて高級な場所だし、珈琲なんて高くて苦くて、煙草の次に必要の無い嗜好品だと思っていた。

当時はおしゃれや流行は吹けば飛ぶような物で陽炎を追って右往左往しているなんて馬鹿な事だと思っていた。惚れた腫れたで一気一憂して TV のあれこれが面白くて mixi がどうのこうの、同じ服を着てテストの点数がどうだ内申がどうだ進路はどうする、将来別々の仕事をして二度と出会わない人々と同じ時間や空間を共有する事が苦痛だった。ただ頭を下げてこの後薄暗い世の中を生きていかないといけない、現状の苦痛からも未来からも抜け出す術は見えない、社会や義務教育は時間と労力の無駄だと思っていた。

そうして学校に戻されるのならばと妥協案として選んだのが珊瑚舎スコーレだった。そこに在籍すれば学校へ戻されなくていい、授業も沖縄郷土の文化や歴史など興味ある物もいくつかあった。三平方の定理より魅力的だった。しかしそこでもうまくいかない。私が受けたい授業は大概専門部の物で、私は当時中等部。結果 5 年程在籍した珊瑚舎だったが高等部 3 年の時に専門部の授業を受ける頃には講師や授業内容も入れ替わっていた。そんな周囲を斜めに見ていた私だったが当時の事は殆ど覚えていない。とにかく恥ずかしい事だったと脳が蓋をしているのである。

ある日、同世代の彼らと仲良くしてみようと思い、どうアプローチをしていいか分からない事に気付いた。挨拶をすればいいの？でも共通の話題が無い。必然、珊瑚舎内や授業の話題しか出てこなかった。私の好きな物は到底少数の物だし彼らの話している内容に興味も関心も同調もできなかった。ただ同じくらい心を許して話せる相手が欲しかった。少なくていいからそういう『友達』が欲しかった。友達の定義について、憧憬を持ちすぎていた。

「学校をつくろう」というテーマの授業があった。どんな意見があっても少数多数に拘らず尊重し、排除せず話し合いで進めていこうという旨だったと思う。結果、話し合いでは平行線の場合、物事は多数意見で進められ少数意見は折衷案もしくは妥協案にのるしか方法が無かった。遅刻するとメンバーが揃わず製作が遅れる。協調しないと納期(発表)に間に合わない。組織で進める物事に足を引っ張る行為は迷惑行為で反感を買う物だった。文字で見ると当たり前の事だが自分の周りに起こる小さな事と理解が結びつかなかった。社会の縮図はこんな小さなここにもあって、うまく渡れない自分に嫌気がさした。

もっと色んな事ができる、自由になれると思って卒業したその年。仕事なら関係ないと思っていたけれど同じ事で何度もつまづいて周囲とうまくやれない事が続いた。会社が変わって相手の立場を考えて

発言する、という事がどれだけ大事で、反対に相手に不愉快や恥をかかせる行動をしている事を何度も教えて叱ってくれる上司に出会った。物事の続かない私がどうにか７年、同じ会社に在籍してたくさん勉強させてもらって、そんな内に子どもも２人できた。私の人生は、反抗してきた事について身を持ってその必要さを知る旅だ。人に失礼にあたらない格好は大事だし、清潔感は第一印象の要だ。柔らかい物腰や礼儀品格は意識しないと身につかない。相手の立場を考えて物事を発言・行動する事は自分のやりたい事を進める為には必要不可欠な力だ。1 人では 10 年かかる物事も 100 人いれば１ヶ月で終わる。1000 人いれば１日。１万人なら１時間だ。好意を持ってもらう事、多種多様な考えを持つ人々が様々な環境で生活し日々生きている。豚肉が好きな人もいれば豚を食べる事がいけない考えもある。そもそも豚自体食べられない人がいる。私達はどこにいっても脳の考える自己倫理観と道徳という自我を持っている。お互いの楽しい生の道に衝突が起こり、一方が崖に落ちる時、私たちは落下防止ネットを崖下に張る事ができるのか。それともメールアドレスのようにそれぞれのニッチな人生を歩んでいく事ができるのか。

けれども人は寂しがりで交わりたがりで群れでいたがる習性なのだ。これから起こる日本国の人口減少や各国の覇権争い、気候変動による住地や食料問題、キャッシュレスの暗号通貨争いもやがて形を整えるだろう。私が、子ども達が、同窓生が、沖縄が、日本が、世界が、地球が、日々美味しい物を食べて軽口を叩いて笑顔で走り回って楽しむ世を生きるためにはどうしたらいいのだろうか。八方美人はダメで、でも傷付けないように意見を交換して、目の前の人と後ろの人と両隣の人と共に生きていかないといけない。そんな答えの見えない小さな大きな課題を毎朝の娘と息子の喧嘩や笑い声を聞いては「早く準備しなさい！」と急かしながら日々を生きている。

卒業していった生徒達、在校中の生徒達、皆が事情はどうあれ笑顔のある日々を歩んでいる接点として『珊瑚舎スコーレ』が葉脈にあり、枝葉の端で密かに背中を押せる頼れる先輩になれるよう準備中のたーくみという葉が１枚、今日も風に吹かれている。

特集！

映画『菜の花の沖縄日記』（沖縄テレビ制作）

先日、那覇市桜坂劇場にて公開に先立ち試写会が開かれました。その試写会の感想を寄せていただきましたので、ご紹介します。

「ちむぐりさ　菜の花の沖縄日記」

桜坂劇場に『ちむぐりさ　菜の花の沖縄日記』を観に行く。普段、DVD も含めて映画を見る機会が皆無に等しいので、映画館まで出かけて行って映画を観るなんて、何年振りだろう。この日は、試写会ということで、珊瑚舎スコーレの生徒たちの顔もちらほら見える。そして上映。

いい。

胸が熱くなった。

自分に問いかけることが何度もあった。

ぜひ、いろんな人に見てもらいたいと思う。

これが感想のすべてだ。

菜の花は 2015 年に石川から珊瑚舎に入学した高校生だ。僕は数度、珊瑚舎や大学でおこなった授業で彼女と会ったことがあるにすぎない。映画は、彼女の高校卒業までの３年間と、その後の話も少し加えて、つまり 2015 年から今年までの沖縄の出来事を、彼女の言葉を借りて浮かび上がらせているというドキュメンタリーだ。

映画の上映後、監督の平良さんが、「菜の花ちゃん

は、自分で考えた言葉じゃないと、台本に書かれていても、決してしゃべれない人なんです」といったことを紹介していた。だから、映画の中で彼女が話す言葉。彼女の文章を基に流れるナレーションは、菜の花の心からでてきた言葉だ。そうした言葉に心打たれて、平良さんは彼女を主人公とした映画を撮ろうと思ったのだとも言っていた。

菜の花は、もともと沖縄にやってくるにあたって、石川の新聞社からエッセイの執筆を頼まれ、連載を続けた。そのエッセイのタイトルが菜の花の沖縄日記だ（こちらはこちらで本にまとめられている）。

辺野古、高江、そして各地でおこる米軍機の事故、米軍関係者のひきおこす事件、それらに菜の花が向き合っていく。

それと重ねあわされるように、故翁長知事の姿がスクリーンに映し出される。

本土の大学で学生たちに沖縄についてのドキュメンタリーをどのように作成したらいいかという話を投げかけたら、「大事な話だとは思うけど、正直、見たくない」という率直な反応が返ってきて、だったらそうした若者たちにどのような映像を差し出せば、そうした思いが突き崩せるかという問いが平良さんがこの映画を作る言動力ともなったという。

本土出身の高校生が見た沖縄の姿だからこそ伝わるものがあるのかもしれない。

そして、菜の花の言葉だからこそ、伝わるものがあるのかもしれない。

映画の最後のほうで、菜の花がガンジーの言葉を引いていた。

「あなたがすることのほとんどは無意味であるが、それでもしなくてはならない。

そうしたことをするのは、世界を変えるためではなく、世界によって自分がかえられない

ようにするためである」と。その言葉が「希望」につながるのだと思う。

菜の花を囲む人々の中には、珊瑚舎の夜間中学の生徒さんの姿もある。夜間中学というのが、どのような場であるのかも、この映画は伝えてくれる。

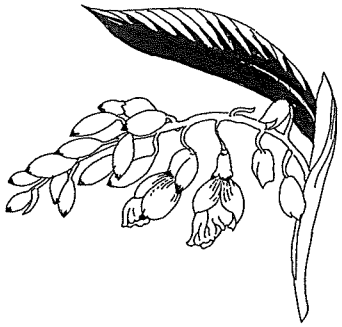
上映後、灯りがついて、人々が劇場を後にしだした。そこここに、「見知った」顔が見える。いや、さきほどまで映画に登場していた人たちの顔が、そんなふうに見えてしまった。その人たちは、映画の中と、まったく同じ雰囲気を醸し出していた。

政府中央部の人間が虚言の嵐を引き起こしている。フェイクが横行するこの時代にあって、いろいろな意味で、この映画には、真実がつまっている。

沖縄大学　人文学部子ども文化学科

盛口　満（ゲッチョ）

マチカンテイー



（夜間中学校のコーナーです）

“まちかんてい”（待ち兼ねていたよ）は「７歳の時から自分が通う学校がいつか出来ると思って、６０年待ちました。夢は実現するものですね」と話してくれた生徒の言葉からもらいました。

連載　聞き書き　その７１

＜Ｋ・Ｓさん談＞

友人から勉強ができるところがあるから、行ってみないと誘われました。入学する気はなかったのですが、気になって一緒に見学しました。今 72 歳、実は 50 年以上前に一応高校を卒業しているので、少し冷やかし気分もありました。でも実際に授業を受けてみると、いろんなことを忘れていることに気づきました。漢字だけではなく、掛け算九九も思い出し嬉しくなり、授業をすんなりと受け入れられました。沖永良部島生まれです。小さい時に母、祖母、伯父夫婦と共に沖縄に移り住みました。那覇に行けば仕

事があるだろうということだったようです。母は住み込みの奉公仕事をして別々に暮らし、祖母との暮らしでした。伯父は当時としては花形職業のトラック運転手でしたので、生活はこの叔父夫婦が面倒をみてくれました。もう一人の伯父は割烹料理店やバーを経営する一方立法議員を務めるなど羽振りの良い生活をしており、生活に苦労はしませんでした。それどころか
ソロバン教室に通ったり、雑誌を欲しいだけ買ってもらうなど当時としては贅沢だったはずです。中学２年の時に一年間沖永良部に帰りました。母は沖縄に残ったのですが、伯父の仕事がうまくいかなくなり、いとこ、祖母全部が帰りました。島にはそれなりの土地、財産があったので悲壮感はありません。ただ沖永良部と那覇では文化的な差が大きく、帰りたい気持ちは大きかったです。

那覇の高校に入学しました。自分で言うのもなんですが優等生で授業料免除生でした。祖母との二人暮らしで、アルバイトもしましたが、生活実感として苦労と思ったことはありません。ただ、将来祖母と病気がちの母、二人を引き受ける立場にあると思うと不安でした。高校卒業後、お前には苦労させられないと二人は沖永良部島に帰って行きました。

私の苦労はここから始まったのかもしれません。今まではなんだかんだ言っても祖母に守られてきました。甘やかされて、人の痛みを感じないところも多々あったと振り返ります。勤めながら仕送りをし、自活するのは大変でした。縁あって子ども３人が誕生しました。育てるために食堂や訪問販売をしました。時間が定時じゃないので、子育ては苦労の連続でした。その訪問販売の仕事が思ってみないほど順調で一時期は販売員を５～６人抱えるほどになり、社長業（笑）でした。子供の学習教材の売り上げで沖縄１位をとったこともありました。でも子ども３人を育てるのは苦労が続きました。子供たちは高校まで行くのはいいが、大学には行って欲しくないのが本音です。次男坊がヤマトの大学に入学しましたが。PC が導入される前に会社を辞め、その後はスーパーで働いています。

夜間中学校の一年目は、こんなの習ったのにと思うこともありました。日本語の感想文を書くのがイヤで先生に文句を言ったりしていました。でも、次第に私はなにもしっかりと理解できていないことが分かってきて、それからは絶対ノーと言わないことを心がけています。楽しんでいます。宿題も出してくれるように頼んでいます。ここの先生方には頭が下がります。分かるまで丁寧に教えてくれる、私たち年長者の生活経験を生かした授業をしてくれる。授業はいつも笑いがあります。そして先生方自身が教えることを楽しんでいる。１ 週間の終わりの授業は音楽です。最後に思いっきり楽しんで声を出す。感謝しています。

★　★事務局便り　★　★

★　アジア麺ロードという企画に参加しました。みなさん会場にいらして頂き、ありがとうございました。その会場準備の際主催者の人から男子は力仕事、女子は軽作業をしてほしいというジェンダーバイヤスのかかった発言があり、一人の男子がそのことを指摘したそうです。ちょっと居心地が悪かったそうですが、ちゃんと言えたよとのこと。違和感を覚えてもその場で発言することをためらい、そのまま収めてしまうことが多いこの国の風土の中で率直に伝える、大切なことです。

★　★　★

●今年度(10 月 1 日～11 月 30 日)寄付・カンパを頂いた方々
石田みどり鹿糠文子坂本和子岡村健手塚賢至照本祥敬市野寿子当山幸江森口美千惠三浦幸子山田道子助川寿美子式部恵子丹羽雅代與儀勝子与那覇晴海湯本貴和上田秀一大城喜春北上田登久子盛口佳子真津昭夫家門収一長嶺由紀子橋川由美子小渡律子幸地江美子城間あずき松茂良米子名城悦子所扶久代石野裕子矢崎智章尾崎せき松田晴代萩原真美城間栄順村上呂理伊波雅子仲里博彦下地孝野村佳雄西山哲平智海竹内新山里愛比嘉慶真矢比嘉大恵古堅苗奥本さつみ岩間つぐ代前田真顕三上幸子高柳英子辻口光生杉浦暁有銘雅子比嘉啓治小野宏治泉恵子工藤英子友寄和子諸見里安信坂本新一朗麻鳥澄江有）ラボータ西田悦子志賀マサ子西原邦男安田圭太郎関正一

発行者　：珊瑚舎スコーレ事務局　　遠藤知子
住　所　：〒900-0022　　那覇市樋川 1-28-1-3F
Tel　　：098-836-9011　　Fax：098-836-9070
Mail　　：sango@nirai.ne.jp
URL　　：http://www.sangosya.com